博士学位論文審査要旨

２００９年7月9日

論 文 題 目：樋口一葉 テクストと作家イメージの生成
学位申請者：笹 尾 佳 代
審 査 委 員：
主　査：文学研究科教授 田 中 励 儀
副　査：文学研究科教授 眞 銅 正 宏
副　査：社会学研究科教授 佐 伯 順 子

要　　旨：

この論文は、〈樋口一葉〉をめぐる文学享受の様相を明らかにすべく、個別作品の同時代的な意義を探るとともに、演劇・映画・絵画など多様なジャンルに亘って展開されたテクストを、1890年代後半から1940年代初頭までを視野に入れて精査した論考である。

第一章「同時代の中の「十三夜」―〈貨幣〉というメディア」では、同作に見られる〈資本〉の暴力と〈貨幣〉の象徴性を、ソシュール言語学などを援用して解読し、第二章「「にごりえ」とメディア戦略―「美人写真」のドラマトゥルギー」では、『文藝倶楽部』巻頭を飾った女性作家の肖像写真を「美人写真」との関連で捉え、「画」（類型）から「写真」（個別）へというメディアの変遷がもたらした状況と、作品の多声的な語りの構造との関係に迫った。いずれも、明治期の文献資料の裏付けを伴った丁寧な作品論である。

第三章「木村荘八「たけくらべ絵巻」の位相―変奏するまなざし」は、1926年～1927年に南画風に描かれた「絵巻」をナショナリズムへの批評として認め、第四章「ラジオドラマ「十三夜」のレトリック―生成される〈家庭〉」は、国民国家創出に寄与したラジオが〈家族〉の結びつきを推進する中で、原作から「父」と「子」を中心とした物語が前景化された事実を捉えた。木村荘八や久保田万太郎といった画家・演出家各自の位置づけが必要とも思われるが、時代とジャンルの特性を明らかにしたところに新見がある。

第五章「一葉「日記」の読書行為―つくられた〈内面〉」は、1912年に公刊された「日記」が、〈内面〉に価値を置く自然主義下の文壇状況において流通したことを重視し、文学におけるジェンダー抗争を認めた。やや性急な論展開とも思えるが、作品だけではなく〈一葉〉という作家が前面に押し出された様相が着実に論証されている。これに繋がる第六章「ドラマの中の〈樋口一葉〉―イメージの創出と変容」は、1930年代に巻き起こった〈一葉ブーム〉の中で作られた、邦枝完二「小説樋口一葉」、浜村米蔵「戯曲樋口一葉」、八住利雄「シナリオ樋口一葉」を分析し、各ジャンルの特質を社会状況との関わりから考察した。さらに、第七章「映画『樋口一葉』の射程―メディアとしての作家表象」では「シナリオ樋口一葉」を詳細に分析し、プロレタリア演劇から商業映画へ場所を移した八住利雄の軌跡を追うとともに、大衆メディアのあり方に言及した。行き届いた調査に基づいた考察である。

第八章「鏑木清方『一葉』の位相―〈肖像〉へのまなざし」は、肖像画の傑作として名高い清方『一葉』の特質を、〈紀元2600年奉祝美術展覧会〉という〈場〉との関係の中で明らかにし、銃後の女性たちの心情との交差を炙り出した。多領域に亘る資料を収集整理し、文学受容の実際とその意義づけに挑んだ論者の研究能力は高い。よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位論文として充分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２００９年7月９日

論 文 題 目：樋口一葉 テクストと作家イメージの生成
学位申請者：笹 尾 佳 代
審 査 委 員：
　主　査：文学研究科教授 田 中 励 儀
　副　査：文学研究科教授 眞 銅 正 宏
　副　査：社会学研究科教授 佐 伯 順 子

要　　旨：

上記の審査委員３名は、2009年７月２日午前10時30分から２時間あまりに亘って学位申請者に口頭試問を行った。

この試問において提出論文に対する質疑に的確な応答が得られ、樋口一葉の人と文学についてはもちろんのこと、演劇や映画、絵画や放送についても幅広い関心と識見を有していることが明らかになった。

また、語学試験（英語・フランス語）に関しても充分な学力を有していることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認められる。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：　樋口一葉　テクストと作家イメージの生成
氏　　名：　笹尾　佳代

要　　旨：

本論は〈樋口一葉〉をめぐって展開されてきた文学享受の様相を明らかにしようとするものである。今日まで続いてきた、樋口一葉文学への高い評価は、その作家自身への関心の高さと密接に関わってきた。そのため、一葉テクストの位置や可能性は、作家のアプリオリな才能へと回収される傾向を見せてきたといえる。一葉文学が享受される場には〈一葉神話〉が作用してきたのだ。

本論第一部「メディアがつくる物語」では、そうした〈一葉神話〉から離れて、一葉テクストを測定しようとする試みである。そして、第二部「メディアとしての作家表象」では、〈一葉神話〉そのものを分析対象として、それを生成してきた言説・表象を検討する。

第一部「メディアがつくる物語」は、作者のもとを離れたテクストを読者へと受け渡してきたメディアの機能に着目し、メディアの特質との関わりのなかで現象するテクストを捉えた。

第一章では、「十三夜」のテクスト内と、それが流通した同時代空間に共通して働いていた〈貨幣〉の作用に着目する。それは、読者の地平へとテクストを接続するメディアの機能を帯びていた。「十三夜」の（上）の物語には、明治２０年代末という時代の影が色濃く写し出されている。それは、〈資本性〉に基づいた価値の指標が生成されていく様相であり、その暴力性を身に受けた女性、お関の姿であった。だが、同時代評において賞賛されていた（下）の物語において、お関と録之助の間に交わされた「紙幣」は、その〈貨幣〉としての作用を相対化するものであった。ソシュールは〈言語〉と〈貨幣〉にアナロジーを認めているが、テクスト内と読者にとっての〈貨幣〉が社会的契約としての作用（ラング）を確立していたからこそ、「十三夜」におけるその個別的な運用（パロール）が同時代読者の賞賛を得ていたと考えることができる。同時代の中における「十三夜」テクストの位置と可能性を明らかにした。

第二章は、「にごりえ」を、それが掲載された雑誌『文芸倶楽部』の特質との相互関係の中に置くことから検討した。『文芸倶楽部』の特質として注目すべき点は、当時ようやく実用化しはじめた銅板写真が巻頭に掲載されていたことである。とりわけ『文芸倶楽部』の特長は、「美人写真」と呼ばれる芸妓たちの肖像写真が数多く掲載されたことであった。「美人写真」は、美人画においては「観念的」に表象されてきた「美人」たちの、その個別性を浮き彫りにする。「画」から「写真」へというメディアの変遷がもたらした状況は、常套句によって酌婦を語る街の声を一方に置きながら、酌婦自身の声によってその個別的な物語を示す「にごりえ」の多声的な語りの構造とパラレルな関係にあった。「美人写真」というメディアの特質と、「にごりえ」の語りの構造とが、読書行為の過程で交差する可能性を捉えた。

第三章は、「たけくらべ」が時代と場所を超えて受け渡されていく様相を検討した。大正末のこの時、「たけくらべ」は木村荘八の手によって絵画『たけくらべ画巻』となって現れていた。視覚メディアである絵画における表象は、「たけくらべ」世界への〈まなざし〉を創出していく。帝国思想が日本画壇と密接に関わっていたこの時、何がどのように見られたのか、という視線のあり方そのものが問題であった。そして、下谷竜泉寺へとむけられたその〈まなざし〉には、ナショナリズムを高揚させる日本の象徴としての風景や、植民地の風景の描写が内包していた思想への批評を認めることができた。

第四章では、ラジオというメディアに置かれることで生成されていた「十三夜」テクストを捉

えた。一九二九年という時代にあって、ラジオという大衆メディアは、国民国家創出と密接に関わりを持っていた。ラジオの文化的機能の紹介には、〈家族〉のレトリックが用いられるのだが、ここには、父を中心に強い結びつきをもった〈家族〉としての国家が作り出されようとしていたことは明らかである。そのようなラジオにおかれた「十三夜」テクストもまた、父を中心に据えた家族の物語という側面が前掲化されていたのである。ここに、テクストとメディアの機能との交渉を捉えた。

第二部「メディアとしての作家表象」では、〈一葉神話〉の内実を検討することを目的として、時代や場所を移すなかでフィクショナルに創出され続けてきた〈一葉像〉に着目した。さらに、それぞれの場において〈一葉像〉がどのような文化的枠組みの中に配置され、また機能していたのかを捉えた。

第五章では、一葉の「日記」がはじめて流通した際の現象を検討した「日記」の刊行は、それを読む読者の裡にそれぞれの〈一葉像〉を編み上げることを可能にした。すなわち「日記」の流通は〈一葉〉そのもののテクスト化を招き起こしたのだ。ここに第二部全体を通して明らかにした、〈一葉〉が多義的なメディアとなっていくことの契機を見る。

一葉「日記」は、〈内面〉に価値を置く自然主義下の文壇状況の中で流通していたのだが、ジェンダーに超えられない差を認める自然主義思潮下において、「日記」を通して結ばれた〈一葉像〉もまた、ジェンダー差を色濃く認められるものであった。そしてここには、〈一葉〉を語るという行為を通しての、文学におけるジェンダー抗争があったのだ。

第六章では、一九三〇年代に巻き起こった一葉ブームと呼ぶべき状況の中で、〈一葉像〉が時代に合わせて再創造されていく様相を明らかにした。この時の一葉ブームの特徴は、一葉を主人公とする物語が多数登場したことであった。そして、「一葉物語」は、小説、演劇、映画へと、表象される場を移していくのだが、それぞれのメディアに置き換えられる際のドラマトゥルギーからは、〈一葉像〉の〈更新〉を捉えることができる。それは、この時増加していた「職業婦人」の物語が、〈一葉〉へと負われていく様相であった。

第七章では、映画『樋口一葉』（一九三九）を検討することを通して、なぜここに、〈一葉〉が必要とされたのかを捉えた。この映画では、一葉の生活が描き出されながらも、それと同一の地平で一葉作品の登場人物たちが登場し、その物語が展開されていた。そして、作品からの〈引用〉といった構成をとってはいるものの、そのエピソードは、１９３０年末の労働者を巡る問題を描き出そうとするものであった。さらに、そうした作品と〈一葉〉との交差は、労働者の問題を目の当たりにし、社会の矛盾を描きだしたプロレタリア作家として〈一葉像〉を創出する可能性をもったものであったのだ。こうした映画の構成がはからずも示していたのは、〈作者の体験〉もまた、作品から遡及的に求められる物語であることだ。強固に働いてきた〈一葉神話〉がここに、解体されはじめる。

第八章は、鏑木清方が描いた肖像画『一葉』（一九四〇）を検討した。ここにもまた、新たな〈一葉像〉が創出されていたのであるが、その特質を、この絵画が置かれた「紀元二千六百年奉祝美術展」という〈場〉との関係の中で明らかにした。清方『一葉』には、画面上に表された像を越えていくまなざしがむけられていたのだが、その背景には、画材として選ばれた一葉の随筆「雨の夜」の存在があった。「雨の夜」には、不在の人を偲ぶ淋しい心情が描かれていた。紀元二千六百年奉祝美術展が銃後の女性に照準が合わせられたものであったことに留意した時、それは、彼女たちの心情でもあった。そうした一回性の場における清方『一葉』テクストと、随筆「雨の夜」との交差は、見る者の心情との共振を可能にする〈一葉像〉を生成していたのである。

本論の試みは、果てしなく続く、テクストの生産と享受の一面を捉えたものである。そしてそこに、テクストとしての作家像がいかに関わってきたのかについて検討した。〈作者〉は〈死〉を迎えることはない。それは終わることのないテクストの生産と享受の場において、機能し続けていくのである。